

2024年9月2日

園内研修

『ともにあること』を支える『記録』のあり方

私たち保育者は何のために保育記録を書くのか。

子どもの学びを表現する記録と教師の学びと往還する記録は、分かつものなのか、それとも融合しうるものなのか。

東京大学大学院教授の浅井幸子氏をお迎えし、保育・幼児教育の記録の目的を、子ども像の転換やドキュメンテーションの歴史と意義との関係性を捉えることで学び、それを踏まえて「記録」の在り方について考える中で、それぞれの実践者にとっての「記録」の意味を再構築しました。

本研修の概要

〈研修時程〉

日時：9月2日(月) 14:00~17:00

14:00~14:10 本園での1学期の研究の概要について
(研究部主任 鎌内より)

14:10~15:40 保育記録めぐり対話

・4歳児担任 立溝より話題提供

・話題提供を受け『保育記録』について感じ考えることの対話

15:40~16:00 浅井先生より記録について話題提供

16:00~17:00 浅井先生のお話を受けて意見交換

本研修の目的

子どもと子どもを取り巻く私たちが同じ一市民として、同じ地平で心地よく生きていくことを対話と省察によって紡いでいきたいと願っています。その中で、「私たちはなぜ『記録』を書くのか」その意味を実践から再構築すべく問い直しを続けています。

権利主体としての「子どもの声」を聴く実践への転換を図るときに記される『記録』とは如何なるものか、保育記録を「書きたい」という思いの源泉はどこからくるのか、専門職として「書くべき」だと感じているからだろうか。

そのような問いを踏まえて、本研修では、東京大学大学院教授の浅井幸子先生に伴走いただき、生きる営みとしての「記録」のあり方やその国の教育で大切にしていることと『記録』のあり方などについて、探究的対話をすすめていき、今ここでの実践者一人ひとりにとっての『記録』のあり方を見つめ、その理解を深めていくことを目的としました。

また本研修はオンラインツールを活用し、園内にとどまらず、他園の先生方にもご参加いただき、他園での保育記録の実際や実践者として書くうえでの迷い・悩みなどを学び合う機会となりました。

(参加者：14名 うち他園の先生方：6名)

本研修冒頭の研究概要では、「そもそも私たちはなぜ『記録』を書くのか」思いめぐらせる中で見えてきた問いが表現された。その中では、我々は記録を「書かなければならない」と思っているだけでなく「書きたい」という思いに駆られている、その源泉はどこにあるのだろうか、といった問いが示された。

4歳児担任の立溝による話題提供では、現状保育現場での記録では、子どもの姿をありありと表現することに注力されていること、一方で教師も保育の当事者であり記録には教師の省察という意味も含まれることを踏まえて、「子どもの学びを表現する記録」と「教師の学びと往還する記録」は異なるものなのか、それらを融合することはできるのか、といった悩みが表された。それを受けて、保育記録と如何に向き合っているのかについて対話した。その中では、多種多様な園での取り組みや保育者の悩みを共有することができた。

また、浅井先生からは、子ども像の転換やドキュメンテーションの歴史と意義を捉えることによって保育記録の意味を捉え直す、というお話をいただいた。その後の意見交換では、保育記録そのものを問うだけでなく、子ども像や記録の歴史など、社会的・文化的背景を含めて捉えることの重要性を再確認した。

浅井幸子先生による話題提供

保育・幼児教育の記録 子どものイメージと目的

浅井幸子先生 園内研修
浅井幸子（東京大学）
2024年11月10日

	子どもの発達や 学びの評価	教師の力量形成	保育・幼児教育 の研究	保護者との連携	異文化の 文化の共有構築
未熟な子ども 保護される子ども	指導記録 ポートフォリオ	エピソード記述 (日本)		クラスだより・ 園だより	
権利と世 帯の主体 としての 子ども	ポートフォリオ (形成的な) ラーニング・ス トーリー (オリジ ナル)	ラーニング・ス トーリー (日 本)	日本の 保育実践 記録	ドキュメンテー ション (日本)	
文化を共 同構築す る子ども		ドキュメンテー ション (オリジ ナル)	ドキュメンテー ション (オリジ ナル)	ドキュメンテー ション (オリジ ナル)	ドキュメンテー ション (オリジ ナル)

ドキュメンテーションの歴史と意義

1960年代
アウツンギ・リチャード
幼児教育の成果を報告す
ることで、20%の資金の
投入を正当化する。

1960年代
記録とインスピレーション
展示が家庭学校におけ
ば、子どもの教師となる
ことに基づく。

1980年代
子どもの「経験」を記録
し、子どもの「知識」を
知るためにプロセスを記
録する

1990年代
幼児教育の質の向上
現場ではなく過程を共有
することによって、幼児
教育の質を向上させるた
めに、記録の出発点が行
われる

園内研修
保育者の記録研究
教育実践
パンフレット

ドキュメンテーションの歴史と意義

1990年代
リエニンズ
子どもに写事制作を
求め、子供が世界に目を
向け、世界を学ぶための
記録

1990年代
評価
子どもの表現や成果、ま
たはアイデアや発見に
価値を認める行為として
の評価を行う

2000年代
記録の活用
子どもたちが学校でな
すこと、保護者や市民を
結びつけ、文化と経験を
共有構築する目的のア
プローチとなる

レジャ・インスパイア
運動のゴール
自分たちの子どものイメ
ージや保護・幼児教育の
イメージを捉え直し、変
革していくための記録

参加者のふりかえり（抜粋）

浅井先生の研修でお話のあった、「日本は、研究として、教師の力量のためという記録の意味が大きい」「レジャのドキュメンテーションでは、文化を一緒につくるために、子どもにとって必要だから記録している」という言葉は印象的であった。今、私にとって「記録」と思えるものは、たしかに決して子どもと共に行っているものではない。しかし我々は、共に世界を創ろうとしている。その私たちの園で、いわゆる「ドキュメンテーション」が主となっていないのはなぜだろうか、と改めて思った。

記録はきっと文化ですよ。園の文化であり、今のあり方がさまざまと
ころに見え隠れするものなのですよ。皆さんのお話をお聞きしてまだ頭
がぐるぐるとしているところです。

頭出し、浅井先生はこのようにおっしゃった。「どんな記録を書くかって子どもをどう捉えているのか、と関係しているんですよ。はっとさせられた。私は今まで「記録はどうあるべきか」と悩んでいた。しかし、その根幹には「私が子どもをどうとらえるのか」があり、それが記録の在り方に反映されていることに気付かされた。

記録は想像していたよりも、また臆げに捉えていたよりも、はるかに社会的、文化的背景を含みこむものだとことを学ばせていただきました。どういった構えで記録に向き合っているか、それを問う中で自身のどうありたいかがまた見えてくるのだといまは感じています。